

優秀賞

思いやり

福井県 武生第一中学校 二年
吉本 栞菜

先日、小学6年生の夏休みに書いた、「小さな親切」作文の下書きが出てきた。その作文は、母方の祖母の介護のことを書いたもので、左半身麻痺^{まひ}になった祖母の着替えを、母は黙って見ているだけで手を貸さなかったので、私が祖母のズボンをあげたりしていたところ、母が「手伝わなくていいよ。」と言ったのでケンカになった、という内容だった。

私が母に、「お母さんは優しくないね。」と言うと、母に「これがお母さんの思いやり」、祖母のできることを奪うのは、「親切でも優しさでもない」ということを言われ、「そういう優しさの形もあるんだなあ」と思った、ということも書かれていた。

それから約半年後に祖母が亡くなり、私は中学生になった。私の心も成長したのか、今になってようやく、あのとき母が言っていたことが理解できるようになった。だんだんと、祖母一人ではできないことばかりになっていく中で、私が手を貸すことで、祖母が一人でできることを奪うことになる。本当は母も手を貸したかったと思う。黙って見守っているのは辛かったのかもしれない。

そして、祖母も母に対し、決して「手を貸して」とは言わなかった。母と祖母にしか分からない、いい意味での何かがあったのだと思った。あのときの私はそのことには気づけなかったが、中学生になった今、そのことが理解できるようになった。

そして、今になってもう一つ分かったことがある。あのとき、私は私なりの親切心で、祖母の着替えを手伝っていた。それに対し、祖母も、

「ありがとう。助かった。」

と喜んでくれていた。私はそれを何も疑うことはなかったし、それは祖母の本心であったと思っていた。でも実は、親切を受けていたのは祖母ではなく、私だったのだ。祖母は、不自由な体でありながらも、自分でできることは一生懸命自分でやろうとしていた。それなのに、私が手伝うと嬉しそうに、

「ありがとう。助かった。」

と言ってくれていたのだ。本当は自分でやってみたかったのかもしれない。祖母は私のすることを尊重して、傷つけないようにしてくれていたのだと思う。

母の言う「これがお母さんの思いやり」のように、あれが、「祖母の私に対する思いやり」だったのだと今になって思う。

祖母にはもう会って気持ちを伝えることはできないが、私は「こちらこそありがとう。」と伝えたい。

のりあーちゃん、ありがとう。